

## 科学は人生を楽しくする

いつでもどこでも、世界中の人に電話をかけることができる。世界中でおきていることが、茶の間のテレビにリアルタイムで送られてくる。道に迷ったら、カーナビが現在地を教えてくれる。今撮った写真をすぐテレビ画面で見ることが出来る。宇宙通信、インターネット、自動翻訳機、マイコン炊飯器、留守番電話機、自動温度コントロール…。私たちが住んでいる社会はこんなに便利になった。しかし、留守番ビデオ撮りのボタンを正しく押せる人で、ビデオの原理を理解している人はいったい何人いるだろうか。たしかに電卓が計算をやってくれるが、その分だけ計算力や数の評価能力が低下したことに気づいているだろうか。便利な機器はすべて人間が作ったものであること、しかも日本人科学者の貢献が大きいことを知っているだろうか。科学ぎらいの人が多い。理数科とか物理学と聞いただけで身の毛がよだつ人もいる。調査によれば、科学に関心をもっているのは、わずか男15、女3パーセント。しかも、この数字は年々減っているという。科学の成果、つまりワープロ、CD、ビデオを使っている若い年代に「科学ぎらい」が増えているという奇妙な現象がおきているのである。科学の成果には、いつも感動がある。どんなスーパーコンピュータにも負けない自分の脳の判断力に、感銘を受けない人がいるだろうか。地球に帰還するスペースシャトルの画像を前に、ドキドキしない人はいるだろうか。オーロラの舞い。彗星の旅。生命の誕生。DNAの整然とした構造。どれをとっても、科学は感動的である。「すごい」と思うだけで人生が楽しくなる。そして、こうした感動と基礎研究の積み重ねで日常の便利な生活機器ができていく。

自然現象は「感じる」もので、無理やり用語や公式を暗記するものではない。科学は、自然への興味や、発見の興奮を伝えるという楽しい使命をもっているはずである。

理科教育を見直す原点はここにあると思う。